

資料紹介

望月恒子

1890年チエーホフによるサハリン住民調査資料

«Быть может, пригодятся и мои цифры...» Материалы сахалинской переписи А.П. Чехова. 1890 год, Южно-Сахалинск, 2005, 599 с.

「私の数字でも、役立つことがあるかも知れない…」－1890年チエーホフによるサハリン住民調査資料、ユジノ・サハリンスク、2005年、599頁。

1890年に3カ月間サハリン島に滞在した作家アントン・チエーホフが、現地で発注したカードを使って綿密な住民調査を行ったことはよく知られている。大著『サハリン島』は、この調査結果をもとに書かれた。旅から帰って3年後の1893年に雑誌連載がはじまり、95年に単行本として出版されたこの書は、チエーホフが生涯でいちばん長い時間をかけて執筆した作品とみなされている。チエーホフは短編小説作家としてすでに10年以上の経歴があったけれども、サハリンを歩き回って直接に見聞きしてきた現実をいかに伝えるか、その方法を見つけるのに苦労した。1893年夏、『サハリン島』の原稿を雑誌『ロシア思想』に渡してから、チエーホフはスヴォーリンへの手紙で、「いつか私の所でお読みになったものは、忘れてください。あれは欺瞞的でしたから。私は長いこと書き続け、違う道を歩いているなど長いこと感じていましたが、とうとう欺瞞に気づきました」（1893年7月28日付け）と述べている。

欺瞞なくサハリンの現状を伝えるために試行錯誤したチエーホフがたどりついたのが、現在我々が目にする『サハリン島』のスタイルである。チエーホフは、旅の前半に新聞『新時代』に寄せた報告記『シベリアの旅』では、明らかに小説家としての顔を見せている。たとえば、冒頭部分で、仲間から遅れてシベリア街道をよたよたと歩いてゆく百姓の姿を見ると、彼の来し方を想像し、さらに生来の怠け者が移住先で寒さにやられて死んで行く末路までも思い描いて、「引っ返した方がいいぜ、おじさん」と呼びかける。こうした小説家としての顔を、チエーホフは『サハリン島』では覆い隠し、島の現在の状況を客観的、具体的に述べることに徹している。言い換えればそれは、住民調査カードの記載事項を全面的に利用するということであった。「アレクサンドロフスクは世帯総数298。住民1499人、うち男923人、女576人」、「第1アルコヴォ村は1883年に作られた。住民136人、うち男83人、女53人。戸主28人、全員家族持ちだが、例外はカトリック信者の女子徒刑囚バヴロフスカヤ」、「タンギ村。住民19人、うち男11人、女8人。戸数6」と、住人が1000人を超える大きな村から戸数わずか6の小集落まで、チエーホフは集落のひとつひとつについて住人の数、戸数、特記事項を克明に報告している。言葉で詳しく語られる村の地理、歴史、現状、チエーホフが受けた印象などと共に、これらの数字は当時のサハリンについて具体的な像を結ばせる。これらはカードがなくては書けない情報である。繰り返しカードを分類しては、統計を行っている作家の姿が目には浮かぶ。

チェーホフがサハリンから持ち帰り、『サハリン島』執筆の原資料として用いた大量のカードは、長くレーニン図書館（現在：ロシア国立図書館）と国立中央文学芸術文書館（現在：ロシア国立文学芸術文書館）で保管されてきた。チェーホフ研究の泰斗M. Л. СемановやB. Г. Катаревなど特別に許可された人だけが直接手にすることができたこの資料が、今年ユジノ・サハリンスクで出版された。チェーホフの場合、文学作品はもちろんのこと、書簡も手帳も可能な限り収集して公刊されてきたから、残された唯一の手書きの未刊行資料が、115年の時を隔てて出版されたことになる。サハリン史研究の重要資料がもっと広範に一般の人に、特に地元の研究者たちに利用可能になるようにという「サハリンツィ」の長年の希望が実現したのである。

本論集のE. И. Савуриエワ論文は、この本が発行されるまでの準備作業を直接の関係者として詳しく書いたものである。保管されてきた調査カードの数は、最終的に7446枚と確定された。これだけ大量のカードのコピーをサハリンの人々が手にするまでの苦労は、チェーホフ『サハリン島』博物館館長И. А. Цепенкова氏が「スラヴ研究センター21世紀COEプログラム報告集 No.6-2」に寄せた論文に詳しい¹。サヴェリエワ氏は、コピー解読作業が一段落した後モスクワへ出張してコピーと原本の照合に当たった人だけに、その論考は具体性に富んでいる。サヴェリエワ、ツепенコワ両氏の論文から、出版準備に携わった多くの人々の熱い思いと苦労が伝わってくる。

この本は流刑囚たちの氏名、身分、年齢などの無味乾燥な情報が並んでいるだけだが、115年前にはるばるサハリン島までやってきたアントン・チェーホフという若者を、一気に身近に感じさせてくれる力がある。たとえば、今回の刊行のための準備の途中、子供について記入したカードには2種類の数字が書き込まれていることが判明した。調査者たちはそれが、子供を年齢別グループに分けて書き込んだ通し番号と、村ごとに人口を集計するための番号であることをつきとめた。我々はそのような数字について、各人のカードの第14項目で知ることができる。チェーホフによる質問事項は第13項目までだったが、それ以外にカードに記されたことやカードの特徴（押されているスタンプや青鉛筆の使用など）を記載するため、編集グループは第14項目を付け足したのだ。我々は第14項目で子供のカードに記された2種類の数字を見て、チェーホフがサハリンで行った調査と帰国後に行った集計作業の、どちらも実に綿密であったことを知ることができる。子供について報告した『サハリン島』第17章には、次のような数字の羅列が見られる。

-現在サハリンの子供の数は、1890年に15歳に達した少年少女を含めて、合計2122人。このうち両親に連れられてロシアから来た者644人、サハリンまたは流刑地に来る途中で生まれた者1473

¹ Цепенкова И.А. О подготовке к изданию материалов сахалинской переписи А. П. Чехова 1890 года // 21st Century COE Program Slavic Eurasian Studies 6-2. 2005. pp.63-76.

人、出生地不明の者5人。

-乳児と4歳以下の子供は、第1グループ（両親に連れられてロシアから来た子供・望月注）にはほとんどいない。（…）第2グループ、サハリン生まれのほうは、乳幼児が圧倒的に多く（…）、1歳未満の子供203人、9-10歳45人、15-16歳はわずかに11人。サハリンで生まれた20歳の者は、既に述べた通り、1人もサハリンに残っていない。

この正確な報告は、自分で考案したカードを用いた医師チェーホフのシステムティックな統計作業の賜物である。また、サハリン島長官コノノーヴィチに禁止されたにもかかわらず、チェーホフは政治囚と会ったとされるが、カードはその事実を確認させてくれる可能性がある。チェーホフの44年の生涯でもっとも注目されるサハリン旅行について、今回刊行された本は多くを考えさせてくれるだろう。

だが、この本の真の価値は、チェーホフ研究の進展にも増して、サハリン研究に寄与するところにあるのは間違いない。今回確認され刊行されたカードは7446枚であった。『サハリン島』に記された住民数を総計すると8095人になる。その差は649枚。ただし、少々細かい話になるが、『サハリン島』には住民数が記されていないのに住民カードは残っている集落がある。アレクサンドロフスク村（95枚）、アルコヴォ哨兵線（4枚）、タライカ越冬地（1枚）で、合計100枚になる。8095プラス100が想定されるカード数とすれば、749枚が失われた数と考えることもできる。いずれにせよ、残念ながらカードが一部失われてしまったことは確かだ。

しかし、1891年1月1日現在のサハリンの人口が16000人という公式の数字が残っている。16000人のうち7446人分の情報がこんなにも具体的に残っているのは、驚くべきことと言えよう。自由民・少数民族を除き、徒刑囚・流刑囚とその家族だけの調査記録であるが、この人々こそサハリン植民の中心的力であったのだ。19世紀末のサハリンの状況を知る上で、『サハリン島』の記述を補完する一次資料が容易に利用できるようになったことの意義は大きい。

サハリンの人々が困難を乗り越えてこの刊行事業を行ったのは、作家への並々ならぬ尊敬の念もさることながら、自分たちの土地を知ることへの情熱が基盤にあったと思われる。本稿筆者は、2005年9月28-30日にユジノ・サハリンスクで開催された国際シンポジウム「アジア太平洋地域の歴史的・文化的空間におけるチェーホフ」において、本書のプレゼンテーションに参加する機会を得た。サハリン州文化局、サハリン州国立文書館、チェーホフ『サハリン島』博物館など諸機関が統合して出版を目指したこと、「サハリン・エナジー」と「エクソン」の石油会社2社がスポンサーとなったことなど、現在のサハリンだからこそやりとげられた事業であるという印象を強く持った。115年前の住民調査カードの刊行という発想自体が、現在のサハリンの人々のアイデンティティ確立の希求と結びついていると思われる。

「ひとりの人間が3カ月で行ったこの仕事は、ほんとうは住民調査とは呼び得ないものである。結果は正確さと完全さを売り物にするわけには行かないけれども、文献にもサハリンのどの役所にも、これより本格的な資料がないので、あるいは私の数字でも役立つことがあるかも知れない」と、作家は『サハリン島』第3章に書いた。刊行された本の題は、この一節からとられてい

る。「数字」は、物語性を排して客観的叙述に徹した姿勢をあらわす象徴的な語である。サハリンに関するチャーホフの「数字」を、本格的に利用できる 때가来たのだ。